随　想

国際会議いろいろと民族文化

後　藤　和　弘*

International Conferences and National Culture

Kazuhiro S. Goto

昨年はたまたま次のような4つの鉄鋼関係の国際会議に出席し，いろいろと感じる所がありましたので記してみようと思います．

1) 第3回国際鉄鋼会議（4月 16～20 日），シカゴ，パルマーハウス
2) 第3回日独セミナー（4月 27～28 日）デュッセルドルフ，インダストリークラブ
3) Basic Oxygen Steelmaking 国際会議（5月4～5日）ロンドン，ヨーロッパホテル
4) 鉄鋼製錬物理化学国際会議（10 月 23～25 日）ベルサイユ宮殿脇国際会議場

開催地の米国，ドイツ，イギリス，フランスはそれぞれ非常に異質の文化を有する国々だと感じると同時に，国際会議の運営の仕方，前後の各種催物に強い民族主義の反映がするのに深い感銘を受けました．

民族主義と言つてもその意味は筆者も良くわからないのですが，「共通の文化圏に住んでいる人々がその文化を誇りに思いそれを非常に大切にする．その結果，違つた民族の文化にも敬意を感じる」とでも定義してみましようか?

第1のシカゴの国際鉄鋼会議は出席してみて驚いたことは，この国際会議は第 61 回 National Open Hearth and Basic Oxygen Steel Conference と第 37 回 Ironmaking Conference の付録の如く運営されていたことです．

例えば後者の NOHBOS と IMC の会場は演台の上にアメリカ国旗の飾つてある見事なバルコニーのついた大ホールでしたが，同時に行なわれている国際会議の方は大体において饅の寝床のような部屋が多かつた．

筆者は国際会議に論文を出したつもりが，いつの間にか NOHBOS の方に入つていて，まあどちらでも良いので何ということもないがいささか驚いたことは事実です．

セッションの座長（アメリカ人）がいきなり部屋に電話をかけてきて，明日の相談をしたいから自分の部屋に来ないかと申し，行けばウィスキーをサービスしてくれました．

自分の部屋でパーティを開いているつもりらしく，いかにもアメリカ的だなあと感じた次第です．シカゴでは他にもいろいろ，いかにもアメリカ的な事を経験しましたが紙面の都合で割愛します．要はアメリカ人は国際主義というもののまやかし的実体のなさを大変嫌いらしい．自分で国際会議を主催しておきながら，それをなるべく重大視しないのではないかと感じたのは筆者1人だけの誤つた感想でしようか?

次の日独セミナーは会議の内容は井上道雄先生の団長としての報告書にあつたので省略しますが，まず泊めてくれたホテルがライン河の岸辺にある近代的ではあるが重厚なホテルでした．バルコニーに出るとラインの大河が右から左へゆつくりゆつくり流れ，河霧をすかしてデュースブルグの街々が見えます．スケジュールがハードで毎朝5時，6時の朝食でしたが，朝食の準備が完全にできていて．ホテルの従業員1人1人が正しくドイツ人の完全主義を身につけていました．

セミナーのあと会議参加者のドイツ人と共にラインの川下りに招待されましたが，これこそドイツ人の誇りで，ライン河に対する郷土愛を感じさせるような話を船の上でいろいろ聞かしてくれました．又各地のワインも自慢らしく次から次へとすすめてくれました．

ロンドンの国際会議では日本鋼管の阪本英一製鋼部長の扇島の建設と操業に関する，圧倒的近代製鉄所とはこういうものだという話しで聴衆が強い感銘をうけていました．又新日鉄，君津の有賀昭三製鋼部長は LD 転炉のライニングはこうこうすると 14000 回もちますよ．しかしこれこれの理由でコストミニマムのところは何千回の所ですよとじゆんじゆんと明快な論理で話をされ，全くその明快さに皆心が洗われたような顔をしていました．この会議では新日鉄の田桐浩一氏が討論に活躍していました．

ロンドンでは田畑専務のおすすめで全員 The Metals

* 東京工業大学助教授　工博

Society の annual dinner に出ましたが，これが牢固たる民族衣装である“デナージャケット”を貸衣裳屋で借りて出席しなければならない仕組になつているようでした．デナージャケットとは日本では立派なホテルのボーイ頭が着ているものによく似た服で，デナーは全員男子のみ，白の蝶ネクタイに黒衣を着て数百人の紳士が勢揃したさまは正しく壮観，一つの伝統絵巻のような感がありました．

さて秋のベルサイユの会議ですが，これははじめからベルサイユ宮殿を売り物にした国際会議らしく，会議の案内書にはいつもベルサイユ宮殿の写真や木版画がついていて楽しい雰囲気でした．フランスではいろいろな分野でこのような国際会議をするらしく，ベルサイユ宮殿正門わきに国際会議専門の大きな建物があり屋上には万国旗が飾つてありました．第2日目の夜，参加者全員をフランス語，ドイツ語，英語の小さなグループに分けそれぞれ案内人をつけ夜のベルサイユ宮殿の部屋の1つ1つを念入りに案内してくれました．夜にした所が苦心の点で，夜ですと他の観光客がいない上色々なシャンデリアには，ローソクのようにゆらめく特別製の電燈がついていました．

この会議では小生も一矢をむくいようと話のはじめに芦の湖を手前にした富士山のスライドを写しました所会場から思わず拍手がわき上りました．

国際会議の第1の目的はもちろん日頃の研究成果を発表しお互いに厳しい批判をし合うことにあります．しかし今回の4つの会議に出席して強く感じましたことは，主催者側の実行委員の1人1人が自分の国の民族文化に強い誇りを持つていて，それを外国から来たお客さんによく理解してもらおうとしていることであります．

自分の国の民族文化に誇りを感じ，その故に他の国の文化に敬意と興味を持つているというような人々が会議を運営することが非常に重要ではないかと感じました．そうすると研究発表の場でのやりとりがどんなに激しくても，参加者の間の関係には敬意と謙虚さがいつもただよいとてもなごやかな雰囲気になるのではないでしようか?

日本で国際会議を主催する場合，もちろん今迄この点を十分考慮して運営されて来たとは思いますが，今後より一層このような姿勢を強くした方が，外国と長くつき合う上でも大切なことではないでしようか?

民族文化を誇りに思うことは何も難しい仏教文化のような精神文化だけを大切にするのではなく，武蔵野のくぬぎ林でも良いし，箱根の旧道でも良いし，要するに自分の郷土にあるものに対する愛着を示すことではないでしようか? ついでに相手の国の郷土の自慢を聞く，これが国際交流の第1歩として常に大きな役割をし，国際会議も実り豊かになるのではないでしようか?